

## ハイデルベルク信仰問答講解説教 12 「キリストとキリスト者」(2011年11月6日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

神よ、あなたの王座は世々限りなく／あなたの王権の笏は公平の笏。神に従うことを愛し、逆らうことを憎むあなたに／神、あなたの神は油を注がれた／喜びの油を、あなたに結ばれた人々の前で。(詩編45:7-8)

イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある箇所が目にとまった。「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、／主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、／捕らわれている人に解放を、／目の見えない人に視力の回復を告げ、／圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。(ルカ4:16-21)

## 【説教】

二回の日曜日を留守にいたしました、何か随分久しぶりのような気がいたします。教会員の立場からすれば、毎週違う牧師が来て説教をするので新鮮さを覚えたという人もいらっしゃるかもしれません。でもこれはある無牧師の教会の方がおっしゃっていたことですが、毎週違う牧師が来て、それぞれの語り口があり、最初はよかったのですが、でも日替わり弁当も飽きます。説教というのは、本来その教会に遣わされた牧師が語るからこそ、真にその群れを養う言葉になるのだと思います。その群れの一人一人の顔を思い浮かべながらつくる説教と、どこかの教会でも通用するような説教では、語りかける対象がはっきりしているかないかで大きな違いが出ると思います。来週は特伝でまた他の教会から牧師を招きますからこういうことを言うのはどうかと思いますが、でもこれは確かなことです。特伝は教会に来るきっかけにはなるでしょう。でもそこで教会に来た人が本当に養われるのは、その教会の牧師が語る説教なのです。どうでしょうか。皆さんもそろそろハイデルベルク信仰問答の言葉を聞きたくってきたのではないのでしょうか。他でもないわたくしがこのハイデルベルク信仰問答の言葉を欲しているのです。この説教を離れて、改めて自分自身がこの講解説教に養われていることを実感します。

さて、今日は第1主日のところ、問31-32のところを手がかりに御言葉に聴いてまいりませう。今日の問答の要点は、「キリスト」という言葉についての説明になりますが、そこではこの言葉に込められている、三つの職務、すなわち預言者、祭司、王という三職がこの第一の要点になります。伝統的な表現では「キリストの三職」と言われますが、これはぜひ今日の説教で覚えてほしいことです。

それともう一つ大事なことがあります。それは問32が扱っていることですが、「キリスト者」ということの意味であります。今日はむしろこちらの方が説教の中心になろうかと思えます。「キリストとキリスト者」という説教題を掲げていますが、イエス・キリストとわたしたちキリスト者と、どういうつながりを持っているのか。実はこのつながりが分からないと、わたしたちが信仰に生きるこの意味、目的を見失うことになってしまいます。信仰者にとってそれくらい重要なことがここで扱われています。

早速、問31から見ていきましょう。信仰問答はすでに使徒信条の第二項、子なる神、イエス・キリストについての問答に入っています。前回の問答では「イエス」という名前についてのことが言われていました。今日のところでは「キリスト」という言葉が問題になります。これはギリシャ語でして、この言葉を旧約聖書の書かれたヘブライ語に直すと、皆さんもよく聞きます「メシア」という言葉になります。クリスマスが近づいてきますが、この時期、キリスト教団ではよくヘンデルの「メサイア」が公演されます。メサイアというのは、メシアの英語

読みです。それは旧約聖書の成就としての、メシア、キリストの到来、そして十字架と復活の出来事までを聖書の御言葉によって綴っていく内容であります。

メシア、キリストというのは、本来「油注がれた者」という意味があります。それは旧約聖書に由来していますが、油を注いで神さまの特別な務めに就かせることなのです。例えば、ダビデが王になる時に、預言者であったサムエルが来て、このダビデに油を注いだ話があります。サムエル記上16:13を読みましよう。そのように主イエスは父なる神さまから選ばれ特別に任職されたのです。そのことを主イエスもまた深く自覚しておられました。それは今日読んだルカによる福音書のところで明らかになっています。このイザヤ書の御言葉がイエス・キリストによって成就、実現したと主イエス御自身がおっしゃるのです。

ではそこには具体的にどのような職務があるのか。主イエスは神さまによってどのような務めに任じられたのか。信仰問答は三つの職務があることを聖書から説き起こしています。まず「最高の預言者また教師」とあります。預言者とは、神さまの言葉を語る者のことです。神さまの言葉には当然ながら神さまの熟慮と御意志があります。ただここで注目したいのは信仰問答がそれを「わたしたちの贖いに関する神の隠された熟慮と御意志」として扱っています。神さまの熟慮と御意志は「わたしたちのあがないに関する」ことなのです。言い換えれば、わたしたちの罪の赦しということです。罪赦されて神の子とされることです。御言葉にはそのような神さまの熟慮と御意志が込められている。

しかも「余すところなく」とあります。その御意志が完全に現れているのがイエス・キリストなのです。ヨハネ福音書に「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」(1:14)とあります。この神さまの言葉が、具体的に肉体をもって地上に現れたのがイエス・キリスト。だから最高の預言者なのです。主イエスこそ、神さまの言葉そのものだからです。

次に「わたしたちの唯一の大祭司」とあります。祭司、これも旧約聖書に由来いたしますが、当時は犠牲祭儀が礼拝の中心でした。レビ記などをご覧になると動物を犠牲としてささげる規定が細かく記されています。犠牲をささげることによって、イスラエルの民は神さまの御前に罪を赦されたのです。祭司はその犠牲を神さまにささげ、神さまの御前に人々を執り成す務めがありました。ですから祭司は罪のあがないと執り成すのために仕える者でありました。

主イエスは、まさにあの十字架によって御自身を犠牲としてささげ、人々の罪をあがなってくださいました。それによって、わたしたちは御前に赦されて神の子とされたのです。それは「唯一の」とあるように、完全な一回限りのもので、キリストの犠牲こそ唯一無二の完全なあがないであります。これによって旧

約聖書の民のように繰り返し犠牲をささげることはなくなりました。

そして三番目に「永遠の王」と続きます。わたしたちはキリストによって罪をあがなわれ、主のもととされました。それは主の主権の下に置かれることです。イエスを主とする、王とすることです。それはこの世のあらゆる束縛から自由になれることです。そこでわたしたちは罪の支配、死の支配から自由になります。またこのキリストのご支配はこの世の支配者のように剣で治めるのではない。「御自分の言葉と霊によって」治めるのです。ヨハネ福音書のところで、主イエスは聖霊を弁護者、助け主としてわたしたちに遣わすという約束をされました。この聖霊がくだって教会が誕生しますが、教会はキリストのからだであり、そこに結ばれてわたしたちは信仰を保つことができます。教会無しにわたしたちは信仰を保つことはできません。先月、修養会が鹿児島島でしたが、その主題は「母なる教会」でした。教会で神さまの懐に抱かれるようにして守られ、その御言葉の乳を飲み、わたしたちは養われるのです。

そのようにキリストは、三つの職務をもってわたしたちに働き、仕えてくださいます。これはキリストについての信仰の基本と申し上げてよいでしょう。でもハイデルベルク信仰問答は、これだけを語って終わりではありません。次の問32へと問答を続けます。「なぜあなたがキリスト者と呼ばれるのですか」そこで信仰問答は更に、このキリストとわたしたちキリスト者との結びつきを明らかにいたします。これはこの信仰問答の大きな特徴ですのでぜひ覚えてほしいことです。わたくしは他の問答は忘れても構わないけれども、ここだけはこの信仰問答を学んだ者として覚えてほしいと思います。それだけこの問32は大切な部分だと理解しています。

それは何よりイエス・キリストとわたしたちは別々に存在しているのではない。「一心同体」という言葉がありますが、まさにそれなのです。「信仰によってキリストの一部となり」とあります。先ほど、キリストのからだなる教会に結ばれて、わたしたちは信仰を守り保つことができると申しましたが、わたしたちはキリストを信じて洗礼を受け、教会につながります。それはただ教会員になったということではなく、キリストと一つになること。その命に与る。しかもそれだけではない。その油注ぎにもあずかっているのです。つまりそのキリストの三つの職務をもわたしたちは生きるようになると、この信仰問答は伝えられているのです。

それはまず預言者として「御名を告白し」。それはわたしたちもその口をもってはっきりとイエス・キリストを信じると言うことができることです。信仰を持っている者は、この信仰を語り証しする者として遣わされているのです。伝道し、御言葉を宣べ伝えることです。そういう預言者としての務めがある。

また祭司として「生きた感謝の献げ物として自らをこの方に献げ」。それは主のために、その栄光のために献身する。キリストが御自身をささげてくださいましたように、わたしたちもこの方のために自分をささげるのです。それは礼拝を守ることにも尽きます。また祭司として執り成しに生きる。隣人の救いのために自分をささげることでもあります。

そして王として生きる。「自由な良心をもって罪や悪魔と戦い、ついには全被造物をこの方と共に永遠に支配する」わたしたちは主のものでありますから、他の何ものにも支配されません。自由なのです。様々なしがらみや人の顔色、この世の価値観に束縛されずに、ただ神さまの栄光のために生きることが出来る。王はそういう自由を持っている。そして戦うのです。様々な悪魔の誘惑に対して毅然と立ち向かう。それに流されるのではない。抵抗していく強さを王は持っている。わたしたちもその務めに生きるのです。そういうキリスト者としての特権と責任がここに示されています。

けれども、この問答を読みますと、わたくしにはこう聞こえます。「しかし、よりによってどうしてあなたがキリスト者なのですか」と。あなたのようなものがどうしてクリスチャンなの

ですか。そんな風に呼ばれる資格はないでしょう。確かにそうなのです。わたしたちがキリスト者、そのキリストという名を身に帯びること自体が非常に恐れ多いことです。それは普段の生活、その歩みを振り返れば明らかかなことでしょう。本当にこの名に恥じない生き方をしてきたか、答えははっきりしている。

でもこのようなわたしでも、神さまは憐れんでくださった。すべてを赦してください、もう一度新しく生き直すことができますのです。それはわたしたちが一人ですることではない。キリストに結ばれて、キリストと一つにされてはじめてわたしたちは新しくやり直すのです。そういう新しい生に生かされた者がキリスト者、クリスチャンです。

先週は、聖路加国際病院の日野原重明さんが熊本に来られて講演会があったそうです。彼もキリスト者ですが、わたしたちは単純に「ああいう人になりたい」「ああいうふうに年をとりたい」と思う。憧れる。信仰を持ったらああいうふうになれる。人から憧れをもたれるようになる。本来信仰者はそういうものなのです。ペテロは「わたしたちを見なさい」と言いました。パウロは「わたしに敬うものになりなさい」と言います。わたしをご覧。それは何か自慢をしているのではなく、こんなわたしでも神さまは憐れんでくださり、救ってくださいました。こんなわたしでも赦されてキリスト者である。キリストが十字架と復活の御業によってすべてを備えてくださいました。どうかキリスト者として胸を張ってその務めに生きていただきたい。お祈りいたします。

天の父。キリストという名を身に帯びるほどの者でももちろんありません。むしろその名を汚してしまうわたしたちであります。しかしあなたはそれでもわたしたちを信頼して、キリストゆえにその名を託してくださいます。そして尊い務めに就かせてくださいます。どうかいよいよ新しい命をもって、この御業に仕えることができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。